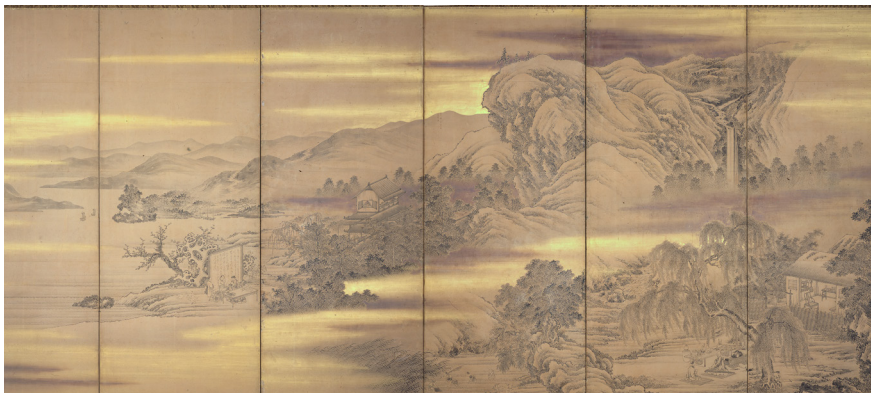
ときの玉手箱

～彦根城博物館からのメッセージ～

第355回

京狩野家の華 狩野永岳

～何にてもしっかりとお見事に出来ます～



山水人物図　狩野永岳筆

ここで紹介する山水人物図は、七絃琴と書を嗜む高士が描かれていることから、本来、山水を背景とした一双の琴棋書画図であった可能性が高いものです。琴棋書画とは、中国発祥の考えで、知識人が嗜むべき四種の技芸、すなわち、七絃琴、囲碁、書、画を言います。右寄りの構図から判断して、こちらが右隻で、失われた左隻には囲碁と画を楽しむ高士が描かれていたことでしょう。

琴を奏で、それに聴き入る人物は、それぞれ、中国・春秋時代の楚の琴の名人・伯牙と、その音楽の理解者・鍾子期。また、鵞鳥をかたわらに扇に書を書く人物は、中国・東晋の書家で、書聖と称される王羲之とみられます。王羲之背後の衝立の書は、武帝の「秋風辞」。中国故事を盛り込んだ知的な画と言えます。

この屏風を描いたのは、幕末の京を中心に活躍した絵師、狩野永岳（一七九〇～一八六七）です。永岳は、桃山時代の狩野永徳の高弟、狩野山楽を祖とする京狩野家の第九代。同家は、永岳の登場により再び隆盛を誇る機会を得ました。京狩野家の画業の基本は、朝廷や宮家、公家、京の寺院等の御用でしたが、永岳の代には大名家の彦根藩井伊家の御用もつとめ、さらには富商や富農層にまで広く受け入れられました。



同　部分

卓越した画力を備えた永岳は、幕末の京都画壇の雄としてその名を知らしめます。当時の画壇は、各家のお家芸の画風に止まらず、多様な画風でもって需要に応えていました。永岳もまた、初代山楽に遡る桃山風の華麗な画風を継承しながら、当時流行していた四条派や岸派、文人画派、復古大和絵派など、あらゆる画風を積極的に採り入れて自家薬籠中のものとしています。

再び本作に戻ってみましょう。人物は、狩野派の基礎を築いた室町時代の元信様を思わせる、古様で伝統的な筆致で描いています。その一方で、土坡や岩は緻密で重層的な皴法を用い、波は細かく震わせた長い平行線を幾重にも重ねる描法で描く点に永岳画の特色がよく出ています。奥行きを十分に感じさせる壮大な山水図も永岳の得意とするところです。確かな筆致で以て、器物に至るまで緻密に描き込んでいることから、本図の制作時期は、三～四十代頃の、気力の漲った中年期と考えてよいのではないでしょうか。

安政三年（一八五六）に発行された『平安画家評判記』で永岳は、「此大先生は何にてもしっかりとお見事に出来ます」と評されています。本作は、この評価を納得させる作品と言えるでしょう。

【彦根城博物館学芸員　髙木文恵】

写真の作品は、特集展示「京狩野家　第九代狩野永岳―多様な画風と画技―」で5月13日（火）まで展示します。